

既存儀禮の隙間を埋める

——タイ北部のミエン（ヤオ）における新しい宗教現象の展開と傳承的基盤——

吉野 晃

一 緒語

ミエン (Mien, Tu Mien) はヤオ (Yao) と他稱され、タイのほか中國南部、ヴェトナム、ラオスの山地に広く分布している民族である。焼畑耕作とそれに伴う移住によって、廣い分布を呈するに到った。タイ北部へはラオス經由で十九世紀後半に移動してきたと推定されている。現在、タイには五萬人ぐらいのミエンが居住しているものと推測される。移住の途上で、ミエンは漢民族から道教・法教的色彩の濃い儀禮體系や父系理念に沿った親族

組織のイデオロギーを受け入れてきた。儀禮文書は漢字で書かれており、儀禮知識の傳承も多くは漢字による。言語はモン＝ミエン Hmong-Mien 語族のミエン Mien 語である。自稱はミエン (Mien) あるいはイウミエン (Tu Mien ユーミエン) であるが、ミエンの方が通常では多く使われる。イウミエンは半ば文章語的な表現である。

本稿では、まずミエンの従來の儀禮體系と宗教職能者について概観した後、ミエン社會に生じた新たな宗教現象について、その展開の機序を見てゆく。



圖1 ミエン語派の言語話者の分布

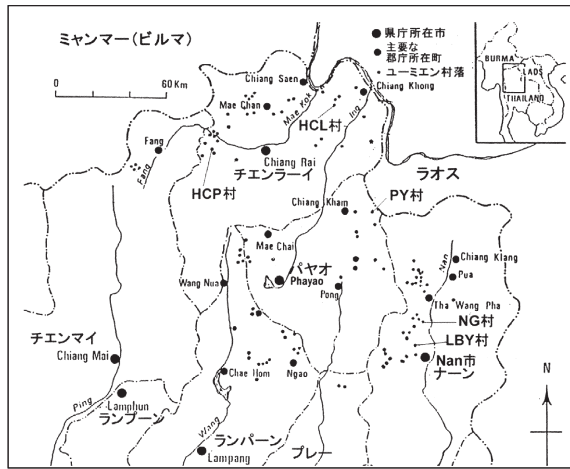


圖2 タイ北部におけるミエンの分布

二 ミエンの従來の儀禮と宗教職能者

(一) 道教・法教系儀禮の概要

丸山宏は、ミエンの宗教の特徴について、法教が道教の一部を包括していると指摘している。漢族の民間宗教

ミエンの従來の儀禮體系は、道教・法教系儀禮と盤王祭祀系儀禮との複合となっていた。

A列に分類されている儀禮では、後述の〈大堂畫像 *g: m: d: ct: mo: 1* (3) 〉という神々の畫像を儀禮場に掛け、畫像に描かれた神々を勸請して祭祀を行う。A列の儀禮は、

では道教が法教を包攝しているのに對し、ミエンでは呪術的指向の強い法教が道教の一部を含み、法教的性格が強く出ているということである。表1には、筆者がタイ北部のミエンの許で直接觀察した儀禮を主に示してある。更に、祭司から聞き取りはしているが直接觀察はしていない儀禮も加えてある。表の枠内の儀禮は道教・法教系の儀禮である。一方欄外に網掛けで示した盤王祭祀系の儀禮として〈歌堂〉がある。基本的には、

表1 タイにおけるミエンの儀禮

	A <大堂畫> tom tɔŋ fa: ŋ を掛け、高位の神靈を招請する。	B 中空<半天高樓>にいる<玉帝> nut tai へ向けた祈願を行う<當天> tɔŋ tʰin または<叫天> heu lun)。	C AとBのいずれもなし。
1 <修道>	<掛燈> <度戒> <加職> <加太>		
2 祖先祭祀	<超度>	<當天安墳>* <拆解>〔掛燈〕<超度> <做身>の儀禮分節として行われることが多い] <安翁太牌>	<尚翁太> <尚家先> <尚外祖鬼> <尚外家鬼> <收兵>* <平安墳>
3 人生儀禮	<做身>〔葬儀〕		<添人口> <拆人口> <出花林> <做親家>〔婚札〕
4 収魂〔生者の魂を呼び戻す〕		<當天架橋>	<架平橋>〔多種〕 <叫魂> <贖魂> <贖花> <搶魂>*
5 穀靈祭祀		<入春>	<招稻魂> <贖稻魂>
6 土地靈祭祀			<設地方鬼> <設地鬼> <頒秋> <開山>
7 厄祓い			<解煞>
8 願掛け・願解き			<許願>〔多種〕 <還願>〔多種〕 <賀年>*
9 謝罪			<釋師父> <釋天地> <釋契父>
10 その他			<設太陽月亮> <設元宵鬼> <奏星> <設百家姓>

* <發童>というシヤマン儀禮を伴う。

欄外 <盤皇> 祭祀: <歌堂>

既存儀禮の隙間を埋める

一日で終わるものではなく、二、三日以上かかる大がかりな儀禮である。1 <修道>の<度戒>と<加職>はまとめて執行されることが多く、その場合約二週間かかる。祭司も複数必要であり、<度戒><加職>では十名を超える。當然、讀誦される經文も膨大な量に及ぶ。經文讀誦には、後述する儀禮語を用いなくてはならない。

B列の儀禮は、<半天高樓> *pian tʰin ku lau* という中空の世界にいる<玉帝> *nut tai* へ向けた祈願(これを<當天> *tɔŋ tʰin* または<叫天> *heu lun* という)を行う儀禮である。この儀禮の時には、<玉帝>宛の上奏文を書き、屋外において、穀物を入れた箕の上で上奏文を燃やし、<玉帝>へ届ける。一人乃至二人の祭司が儀禮を執行する。敷時間を要するが、一日以内で終わる。言語は儀禮語を用いる。

C列に分類されている儀禮は、最も簡単な儀禮であり、短いものでは三十分、長いものでも二時間程度で済む。通常、一人の祭司が儀禮を執行する。祖先靈、土地靈、作物靈、守護靈、その他の自然界の靈(太陽や星など)、

人間の靈魂などを祭祀對象とする。これらの儀禮は日常的な心配事対策や健康祈願などでしばしば行われる。

(二) 〈大堂畫〉

A列の儀禮で用いる〈大堂畫〉は、三清を首座とする道教・法教の複数の神々を描いたものである。一枚の畫に一名乃至複数名の神が描かれており、大きな畫像十八枚、小さな畫像數枚が一セットとなっている。畫像は掛け軸のように巻いてしまつてある。これを儀禮の時に壁に掛けて道場とするわけである。儀禮によっては、二セットの神像を掛けることもある。〈大堂畫〉に描かれている神々は、以下の通りである。(一)〈元始(靈始)〉
jian si' (一)〈靈寶〉*leŋ pu'* (二)〈道德〉*toŋ taŋ'*
 (四)〈玉皇〉*juŋ huŋ'* (五)〈聖主〉*siŋ tsjuŋ'* (六)〈張天師〉*tsjaŋ t'hiŋ sai'* (七)〈李天師〉*lei t'hiŋ sai'*
 (八)〈行司〉*heŋ ŋei'* (九)〈大尉〉*tai nai'* (十)〈家先〉*cu: ŋi'* (十一)〈十殿冥王〉*tsiap tin liŋ huŋ'*
 (十二)〈大堂海簾〉*tom tɔŋ hai ŋai n'* (十三)〈海簾〉

hai ŋai n' (十四)〈天府地府〉*t'hiŋ ŋau tei ŋai'* (十五)陽間水府 *ŋai ŋ ciam sui ŋau'* (十六)〈鄧元帥〉*tuŋ juŋ-swei'* (十七)〈趙元帥〉*tsau juŋ-swei'* (十八)〈大道橋〉*tom to cau'*。このほかに小さい畫像がいくつかある。〈祖宗〉*tsuŋ tsuŋ'* 〈天府地府功曹〉*t'hiŋ ŋau tei ŋau koŋ tsu'* 〈陽間水府功曹〉*ŋai ŋ ciam sui ŋau koŋ tsu'* 〈五旗兵馬〉*m ke peŋ ma'* 〈禁齋〉*ciam sei'* 〈禁庚〉*ciam keŋ'*である。十八枚の大きい畫像は揃っていることが多いが、小さい畫像の方は何枚か缺けていることもある。十八枚の神像の首座は(一)〜(三)の〈三清〉*ŋau m tsuŋ'*であり、掛けるときには、(一)〈元始〉を中心として左右に展開する。〈元始〉は經典では「元始」と書かれているが、口頭や筆記で説明するときなどは、⁽⁴⁾〈靈始〉*leŋ si'*といわれることが多い。

(三) 従來の宗教職能者

ミエンの従來の宗教職能者には以下の分類がある。表1の儀禮分類に従つて説明する。(一)表1のC列の儀

禮を執行できる者を「設鬼人」*sh. mian mian* という。

(二) B列の儀禮まで執行できる者を「做師小人」*tsu sui tsi mien* とし、(三) A列の儀禮も執行できる者を「做大師人」*tsu tou sui mien* という。「做師小人」と「做大師人」を「做師人」*tsu sui mien* と總稱する。これら三種の祭司を總稱して「設鬼人」ということもある。すなわち、廣義の「設鬼人」は祭司一般を指し、狹義では最も簡単な儀禮を行える祭司を指す。

それぞれの儀禮に漢字で書かれた經文がある。いずれも道教・法教的な色彩の強い經文である。神に祈願を奏する文書の中で自らのことを稱して「太上奉行北極驅邪院傳通閻梅二教三戒弟子」と表現する。これは、ミエンの奉じている宗教が法教の閻山教と梅山教の二教の習合であることを明言しているのである。丸山の指摘通り、道教的な要素を含みながら、法教的な特徴が強くでている。C列の儀禮は短く、大方の祭司は經文を暗誦しているが、A列とB列の儀禮は長く、經文を讀誦することになる。

既存儀禮の隙間を埋める

祭司の他にシャマンがおり、「發童人」*put tou mian* という。「揚州洞」*jan tsau tou* にいる「引童翁」*jan tou ong* という神靈を降ろし、託宣・祓除・淨化を行う。従来は、祭司と「發童人」いずれも男性のみであった。しかし、祭司の数はかなり減少している。表2には一七八七年時點での筆者の調査地二ヶ村における祭司の数を世代別に示した。かつては、このように多數の男性が祭

表2 「設鬼人」の數

	NG村	PY村	A (計)	B	A/B
二十代	6(0)	2(0)	8(0)	67	12%
三十代	6(1)	6(1)	12(2)	41	29%
四十代	13(4)	3(2)	16(6)	37	43%
五十代	7(4)	5(4)	12(8)	26	46%
六十代	7(3)	5(2)	12(5)	15	80%
七十代	0	3(2)	3(2)	5	60%
八十代	1(1)	0	1(1)	1	100%

* 年齢の計算は數え年による。1987年時點。

()内は「做師人」數。

A: NG・PY兩村の「設鬼人」數合計。

B: NG・PY兩村の男子世代別人口(一部推計含む)。

A/B: NG・PY兩村の「設鬼人」數が世代別男子人口中に占める割合。

司であり、儀禮を執行できたのである。筆者が長年調査を行っているバヤオ縣のPY村では、一九八七年時點で二十四名であつたのが、二〇一七年時點で訊いたところでは十二名と半分が減っている。年老いた祭司が亡くなる一方、若い者が祭司にならないからである。

ミエンの儀禮においては、男性中心主義的傾向が強い。右に述べたように、儀禮を執行する宗教的職能者は男性である。また儀禮執行者以外の儀禮の場に參列する者も、儀禮の後の直會の正式の席に着くのも男性のみである(女性用の席がしつらえられることもあるが、副次的である)。漢字を學ぶのも、従つて漢字經文を讀めるのも男性だけである。學習機會が男性に限られていたため、儀禮語を知るのも男性のみである。このように、儀禮に主體的に關わるのは男性だけというのが從來の儀禮の體制であつた。

(四) 儀禮に用いる言語と歌謠語

ミエンが使う言語は複雑である。ミエン口語ミエンワ *— mien wa* と歌謠語ツウンニエイワー *dung nei wa* と

儀禮語ツイアワー *tsia wa* (ミエンは廣東語ケックワー *kek wa* だと言う) の三種が基本で、かつてこの地域の山地民族間のリンガフランカであつた漢語雲南方言(西南官話)ケックワー *ke? wa* がこれに加わる。現在はこちらの四種の「言語」(ワー) が使われている。道教・法教儀禮に用いる言語はこのうちの歌謠語を除く三種である。儀禮語は表1のA列・B列の儀禮に用いる。韻文經文は多くの場合儀禮語で讀誦される。一方、漢語雲南方言とミエン口語は、表1C列の儀禮(簡単な儀禮)で用いられる。C列の諸儀禮は祖先に對する儀禮が多く、その場合、ミエン口語か漢語雲南方言でない⁶⁾と祖先に通じないという。かつてラオスやタイで漢人の教師がミエンの少年に漢字を教えていたときには漢語雲南方言で漢字を教えていた。そのため、一九四〇年代以前生まれの男性の多くは漢語雲南方言を話せた。この儀禮語と漢語雲南方言は、ミエン語とは異なる言語である。

歌謠語は、日常會話で用いられるミエン口語と異なり専ら歌謠にのみ用いられる語彙群を指す。パーネルは文

語 the literary language と述べている。⁽⁷⁾ 同じ漢字の讀みでも、ミエン口語と歌謠語では異なることがある。このように語彙の上では大きな相違があるが、統辭的にはミエン語であり、別の言語であるわけではない。もっとも、ミエン口語しか知らない人が歌謠語を聴いても意味は分からない。ミエン語のワーウは日本語の「語」のように、個別の言語〔英語〕などを指す場合と、特殊な語彙や言い回し〔雅語〕などを指す場合とがあり、ツウンニエイワーは後者である。

同一の漢字をミエン口語と歌謠語、儀禮語、漢語雲南方言でどのように發音するかを左に示す。

不		
マイ、ム <i>mai, m</i> (口語)	}	
ヤーム <i>ja:m</i> (歌謠語)		
パッ <i>pa?</i> (儀禮語)		
プ <i>pu</i> (漢語雲南方言)		

既存儀禮の隙間を埋める

三 新たな宗教現象―女性の参入―

筆者はこれまでに、北部のミエン社會において二〇〇〇年代初頭以降に生じた新たな宗教現象について、その概要を報告してきた(チエンラーイ縣のHCL村とHCP村)。⁽⁸⁾ 今までに明らかになったことをまとめると以下の通りである。

(一) 焼畑耕作に伴う移動生活を續けてきたミエンの村に固定的祭祀施設へ廟 *min* が建設されるようになった。(二) 右に述べたように男性が獨占してきた儀禮執行に女性がシャマンとして参入し始めた。(三) 女性シャマンは、従來の儀



寫眞1 HCP 村の〈銀山廟堂〉

表3 ミエン村落における〈廟〉と祭祀者

村	〈廟〉		祭祀者	儀禮日
	建設	祭神(像など)		
HCL (チエンラーイ縣 ドーイルアン郡)	2001	盤王 唐王 七姐 十二姓瑶人祖先	女性シャマン2名	陰曆毎月 初一日、十五日、七月 十四日(七月十五日はなし)にセア ンス・焼香
HCP (チエンラーイ縣 ムアン郡)	2004	盤王 唐王 老君 郎老 伏羲姉妹 七姐 將軍 三清	女性シャマン 推定40名以上(實際 に儀禮に出席するのは約20名) 男性シャマン 數名 男性祭司1名	陰曆毎月 初一日、十五日、正月 初一日～三日、七月十四日にセ アンス・焼香
NG (ナーン縣 ムアン郡)	2010	盤王(画像)	男性祭司1名	陰曆毎月 初一日、十五日に焼 香。正月初一日、七月十四日に (設鬼)
LBY (ナーン縣 ムアン郡)	未建設 (女性シャ マン宅)		女性シャマン1名	不定 (セアンス 神が降りてきた 時)

禮で行われてきた
讀經ではなく、歌
を唱うことによつ
て儀禮を執行して
いる。(四) 儀禮
における女性シャ
マンの歌は、ミエ
ン口語と異なる歌
謠語によつて唱わ
れる。(五) この
ような〈廟〉の建
設と女性シャマン
の雙方あるいは一
方をとともう宗教
現象は一村にとど
まらず、複数のミ
エン村落に広がっ
ている。

(二) については、表3にその状況を示した。二〇〇
一年にチエンラーイ縣のHCL村で〈盤王〉を祀る
〈廟〉が建設されたのを初めとして、HCP村、NG村
と續いた。この他にやはりチエンラーイ縣内のミエン村
落に新たな〈廟〉が作られたという話は聞いているが、
まだ現地調査していないため、表には示さなかった。こ
うした固定的祭祀施設の建設は、ミエンの定住化が進ん
でいることを示すものである。

以下では、主にHCP村にある〈銀山廟堂〉における
宗教現象について述べる。(二)と(三)については、
儀禮における男性中心主義は大きくは變わらない。しか
し、漢字を學び祭司になる男性がいなくなり、儀禮の存
續が危ぶまれている。そこに女性シャマンの参入があつ
た。その参入の仕方は、書承文化に基づいたものではな
かった。男性が行う讀經ではなく、降靈したシャマンが
ツウン(歌)を唱つて儀禮を執行しているのである
(四)。先に述べたように、ツウンに用いるのは歌謠語
である。すなわち、口語だけ話せても、ツウンは唱えな

い。神が降りて憑依すると、神がツウンを唱って託宣を行ったり、儀禮を執行したり、あるいは儀禮の執行法と唱え言をシャマンに指示する。ツウンを唱っている、あるいはツウンを教えたのは神ということになる。このツウンが女性の儀禮執行への参入の鍵となっている。

女性シャマンがトランスに入り、降神することを「入陰」<pa:in< という。神が降りてくると動悸が速くなったり、手足が冷える、身體が熱くなるなどと身體的變化を述べる人が多い。「入陰」しているときには、貧乏揺すりのように脚が小刻みに震えている。

「入陰」時の神の作用は以下の通りである。(一) 降神して、シャマンに儀禮のやり方、唱え言のツウンを教える。シャマンは「入陰」して「盤王」・「唐王」に對する儀禮や道教・法教の儀禮を神の指示のもとに行う。唱わない神もいる。その場合は儀禮の所作だけである。

(二) シャマンの口を借りて、神が直接託宣する。ツウンの場合も口語の場合もある。(三) シャマンの身口を借りて神が直接儀禮を行う。この場合も唱わない神の場

合は儀禮の所作だけである。佐々木宏幹の憑靈の類型でいえば、(一)は「靈(力)が人物の外側から、人物にさまざまな影響を與える場合」の「憑感」に相當し、(二)と(三)は「靈(力)が人物の中に入り込んで、人物が靈自體として言動する場合」の「憑入」に相當する⁽⁹⁾。いずれも神が憑感あるいは憑入するので、シャマンであるが、(一)と(二)は憑感あるいは憑入の状態である。祭司として儀禮を行うので、シャマン祭司である。

普段はツウンを唱えない(歌謠語を知らない)が、「入陰」すると唱えるようになる」と述べる女性シャマンが多い。「入陰」しなくてもツウンを唱える人もいるが、少数である。普段はツウンを唱えない人が「入陰」するとツウンを唱えるようになることが降神の證となっているのである。

新しい儀禮の中における女性シャマンが行う儀禮には、幾つかの種類がある。(一)クライアントの靈魂の強化儀禮(祭壇・供物は伴わない)。これはクライアントの魂(十個あり、離脱可能)を呼び戻し、手首に絲を巻いて體



寫眞 2 女性シャマンの儀禮 (祭壇と供物を用いる)

に封じ込める儀禮である。(二) 祭壇・供物を伴う祓除儀禮や治療儀禮、祖先祭祀儀禮、強化儀禮(二)とは別などである(寫眞2)。(一)と(二)は表1のC列の儀禮に相當する。(三)クライアントの相談に對して、降神して歌唱し託宣を伝える儀禮などである。女性シャマンの行う儀禮は、従来の男性祭司が行う儀禮の重要なものとは重ならず、男性祭司の減少に對應したマイナーな儀禮の需要を補足的に満たしているのである。

HCP村の「銀山廟堂」に集う女性シャマンは二〇一六年陰曆正月の時點

で二十數名であった。二〇一八年の時點では四十名を超えたと見られる。儀禮を指導する男性祭司・女性シャマンと師弟の關係を結ぶのであるが、その師匠役の祭司が何人弟子を取ったか一々覚えていないため、精確な數字は分からなかった。二〇一九年陰曆正月以降、その男性祭司が「銀山廟堂」の儀禮活動から離脱し、それに伴って三分の一ほどの女性シャマンも離脱したため、二〇一九年陰曆七月時點で「銀山廟堂」で活動している女性シャマンの數は二十數名のレベルに戻った⁽¹⁰⁾。

四 ミエンのツウン(歌)

(一) ツウンの特徴

ツウン(歌)は道教・法敎系儀禮とは異なる分野を構成する。ツウンで用いられる言語は先に述べたようにツウンニエイワーという歌謠語である。

道教・法敎系儀禮における經文讀誦は、散文經文の場合には一定のリズムはあるが、節は附けずに讀誦する。七言の韻文經文の場合には節を附けて讀誦する。しかし、

儀禮を執行するときにツウンを唱うことはない。經文中に「○○歌」という題目の經文があつたとしても、それはここでいうツウンではなく、儀禮語で讀誦される。儀禮中の「○○歌」を讀む曲節は、ツウンの曲節とは全く異なるものである。

ツウンは、婚禮などの儀禮に伴う宴會において言祝ぎに唱われるほか、個人が自分の想いや考えを歌詞に書き(*fa dang*)、唱うこともある。總じて見れば、儀禮經文が定型文であるのに對し、ツウンは創作される點で異なっている。また、男性のみが行う經文讀誦と異なり、ツウンは、男女いずれも唱う。

歌詞の七音節句(七言句)をイエットガン *jiet gan* あるいはイエットチヨウワー *jiet cian wa* という。イエット *jiet* は「一」の意味である。四ガンでイエットテ *jiet tin dang* という。譯すと「一つながりの歌」(一條歌)となる。漢詩で言えば、「七言詩」である。これが歌の單位となる。

既存儀禮の隙間を埋める

(二) 詠唱法

ツウンには以下の四種の詠唱法がある。(一) パーオツウン *pa: u dang* (二) トツツウン *to? dang* (三) ツエンツウン *ts'en dang* (四) コンツウン *kon dang* である。

パーオツウンは、狹義では韻律に従つた歌詞を長い曲節(*fa dan*)を附けて唱う詠唱法である。ツエイ *sei* とファー *fa* という規則的な囉子詞(挿入音節)の挿入が伴う。一字ごとに「産み字」(母音長音)をつけ、比較的高音になる。本來は男女の歌掛けの形式で唱われる。婚前の求愛活動の歌掛けの唱い方である。その時にイエットテイウツウンごとに唱い合う。一行の上一句を一度唱い、その後下句を二度唱う。

トツツウンは、『イウミエン語—英語辭典』によると「輕快な裝飾を伴つた『讀む』スタイルで歌を唱う。『文化的説明』歌を讀むスタイルは、比較的裝飾のない平板なメロデー^①を用いる。トツツウンは「讀む」「音讀する」の意味で、漢字を當てれば「讀」である。書かれた

歌詞を読み唱うことである。祭司の説明を加えると、用いる言語は歌謡語であり、パーオツウンと比べて曲節が短い (*chia nup*)。同じ歌詞をパーオツウンで唱うことも、トツツウンで唱うこともできる。

ツェンツウンは、「婚禮で乾盃を促すときに唱う歌」である。結婚式の宴席で言祝ぎのために唱われる。『イウミエン語・英語辭典』では婚禮に限定しているが、新年の「拜年」という儀禮の時にも唱われる。歌の冒頭には *phên ɔ: ɛ khen a'* と唱えることが特徴だが、節回しはトツツウンと同じである。

コンツウンは、筆者の調査では、三種類の詠唱法が含まれる。①韻律と定型に従った即興の歌詞 (*im p*) を短い節を付けて唱うこと。節は基本的にトツツウンと同じである。但し、既存のテキストを読まない場合も含まれる。②歌詞を節をつけずに読み上げること。③歌詞の定型に従っていない文章を節をつけて唱うこと。¹⁴

表4は、パネルが調査したミエンのツウンの種類である。¹⁵ 詠唱法について見てみると、トツツウンが多い。

ツェンツウンは、独自の挿入句が入ることを除けば節回しはトツツウンである。よって、基本的な詠唱法はパーオツウンとトツツウンの二つに收斂する。

他村のミエン祭司に「銀山廟堂」の儀禮の映像を見てもらい検討したところ、パーオツウンで唱っていた事例はほとんどなかった。基本的にはコンツウンであるが、簡単な儀禮と複雑な儀禮とで使い分け(意圖的であるか否かは不明であるが)がなされていると看取される。筆者の見たところでは以下の通りである。(一) 簡単な強化儀禮では、コンツウン③であり、歌謡語ではなく、ミエン口語を用いている。(二) 祭祀儀禮と(三) 託宣儀禮ではコンツウン①で歌謡語を用いている。トツツウンは、既存の歌詞を読み上げる唱い方が原型なので、節回しはトツツウンであっても、即興の場合はコンツウンと言うと考えられる。

いずれにしても、従来の道教・法教系儀禮においては右に述べたパーオツウンあるいはトツツウンの節回しでは唱わない。ツウンをパーオツウンあるいはトツツウン

表4 ミエンの歌の分類 (Purnellによる)

番号	類型			詠唱法	唱い手・参加者	内容
	Mien字表記	IPA表記	漢字表記			
1	zingh youh	tsiŋ˥ ɰəu˥	情由	トツ／パーオ	個人から戀人・求愛対象者へ	戀愛、別れ
2	zeiv muic	tsɛi˥ mui˥	姐妹	トツ	個人から親族へ、あるいは、親族の所在を知っている可能性がある人へ	親族との別れ、親族再會の希望
3	naanc zingh	na:n˥ tsiŋ˥	難情	トツ／パーオ	個人から聴衆へ	自傳的、困難と悲しみを語る
4	zunh lungh ndiev	tsun˥ luŋ˥ diə˥	傳天底	トツ／パーオ	個人から聴衆へ	自傳的、大きく悲痛な悲しみを語る
5	gouv	kau˥	古	トツ	個人から聴衆へ	物語、神話
6	maaz-dauh	ma:˥ -tau˥	碼頭	パーオ	主人から客人へ、客人から主人へ(時に競り合い)	もてなしに対する賛辞
7	cuəv gaengh	tsʰuat˥ keŋ˥	出門	トツ／パーオ	主人から出離する客人へ、その逆	賛辞、祝福、別れの悲しみ
8	aah nziaauc	a:˥ ɰja:u	■玩	パーオ	個人が自らに對して/個人から友人へ、その逆(時に競り合い)	楽しみ、好意、求愛、友情、労働
9	njaaux mienh	ja:u˥ miən˥	教人	トツ／パーオ	個人から聴衆へ	教育、訓戒
10	jaapv-zaangv	ca:p˥ -sa:ŋ˥	甲子	トツ	個人から聴衆へ	六十干支(の性格)
11	junx	cun˥	郡	トツ／パーオ	主として、婚禮の嫁方から	隠語によるクラン・アイデンティティ
12	bom	pom	?	パーオ	少女たちから少年たちへ、その逆	當意即妙の掛け合いによる求愛と娛樂
13	ormv	ɔm˥	隱	トツ／パーオ	少女・女性たちから少年・男性たちへ	主として、歌詞に隠された謎かけ 賢さを競う
14	cenv	tsʰen˥	?	ツェン	婚禮の諸役擔当者と賓客たちがお互いに	慣習的謝禮と一般的祝福

注:原文ではミエン字表記の聲調は数字で示されている。それを通常の聲調表記に改めた。
IPA表記と漢字表記は吉野が付加した。

Purnell 1991:379.

で唱うことは、道教・法教系儀禮とは全く別の活動である。一方、盤王祭祀系の儀禮の〈歌堂〉*ban dui ŋ*はツウンを唱う。〈歌堂〉では〈盤王〉に對する謝恩儀禮と、それぞれの家の願掛け祈願に對する願ほどの儀禮が行われ、〈盤王大歌〉などは歌謠語を用いたツウンで唱われる。しかし、新宗教現象のツウンとは異なり經文に書かれた定型詞であつて、俗謠としてのツウンに見られる創作性と即興性は無い。逆に言えば、新宗教現象におけるツウンは、神の作用で即興的なツウンを儀禮のために創出している。また、〈歌堂〉はトラブルに對處する祓除儀禮や強化儀禮ではない。祓除儀禮や強化儀禮は専ら道教・法教系の儀禮(表1のC列)として行われてきた。それを代替する形で儀禮執行の女性參入は展開された。

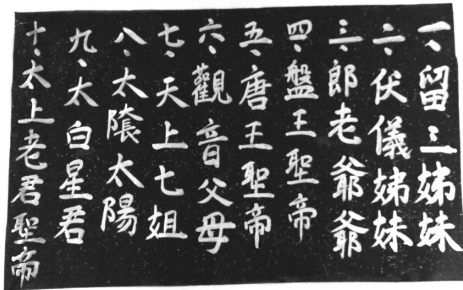
儀禮でツウンを唱うのは盤王祭祀系儀禮で行われてきた。新しい宗教現象においてはそれを應用して、ツウンと祓除儀禮や強化儀禮などの表IC列の儀禮を結びつけ、道教・法教系儀禮で使われない即興的ツウンを儀禮執行に導入した。ツウンを唱って儀禮を執行する方法の導入は、漢字を読めない女性がへ入陰へしてツウンで儀禮を執行する途を開いた。すなわち、ツウンの儀禮への應用は、女性の儀禮參入をもたらししたのである。

五 祭神

(一)へ廟へにおける祭神

へ銀山廟堂へにおける主な祭神は、へ盤王へとへ唐王へ以外は、漢族の民間傳承を受容したものと推察される。

へ銀山廟堂への壁には祭神のリストが貼ってある(寫眞3)。そこには「一、留(劉)三姊妹 二、伏儀(義)姊妹 三、郎老爺爺 四、盤王聖帝 五、唐王聖帝 六、觀音父母 七、天上七姐 八、太陰太陽 九、太白星君 十、太上老君聖帝」とある。祭壇においては、一から七



寫眞3 <銀山廟堂> 内部の壁に貼られた祭神のリスト

までは向かって右側からほぼこの順で神像が配列されている。ただ、十のへ老君へは二へ伏義姊妹へと三へ郎老へと間にあり、また八へ大陰へへ太陽へと九へ太白へは神像が無い。四へ盤王へが中央を占めている。以

下では中央に祀られている神から説明する(寫眞4)。

へ盤王へ *panwang* は、經文による傳承「盤王大歌」がある。ミエンの祖先たちが海を渡った(へ飄遙過海へ *pyaoyao guo hai*) ときに救護した神々である。このときの願掛けにより、ミエンが盤王への謝恩儀禮(へ歌堂へ)を行う義務を負うことになった。他のテクストでは、天地開關のへ盤古へと、へ飄遙過海へ時にミエンの祖先たちを



写真4 〈銀山廟堂〉内の祭壇 中央部分

中央が〈盤王〉とその妻、向かって左側一人目と二人目が〈唐王〉夫妻、向かって右側二人目が〈郎老〉、三人目が〈太上老君〉、四人目と五人目が〈伏羲姉妹〉。

救護した〈盤王〉が混在している。従来行われてきた〈盤王〉への謝恩儀禮である〈歌堂〉においては、〈盤王〉の像は無い。祭壇には〈盤王〉を象徴する切り紙が掲げられるだけである。〈盤王〉を立體像で可視化した

既存儀禮の隙間を埋める

のは、HCL村の〈廟〉が初めてであり、〈銀山廟堂〉でもそれを踏襲している。

〈唐王〉 *tao wang* については、盤王祭祀系の經文に「出世唐王先出世 唐王出世在連州 唐王出世連州廟 ……」とあり、〈盤王〉と並んで「三廟大王」の神とされる¹⁶。また、筆者が採集した「唐王歌」という歌詞テクストによれば、〈唐王〉は曾てミエンたちを治めた王であった。その治世下ではミエンは安樂に暮らしていたが、その後の歴史的變遷により、ミエンは移動生活を餘儀なくされ、〈飄遙過海〉も行い、中國から東南アジアに移動して苦しい生活を過ごしている。しかし、將來〈唐王〉が再生し、ミエンを呼び戻して安穩な治世が再來する。このような千年王國的な圖式を持った〈歌〉である¹⁷。また、タイ國內で初めて〈廟〉が建設されたHCL村（チェンラーイ縣）の〈廟〉創建のきっかけも、「唐王を祀れ」という託宣であった¹⁸。

〈郎老〉 *lang-lo* はこの世界の初め、太陽が生まれる前から存在した（口承傳承）。〈伏羲姉妹〉に夫婦となるよ

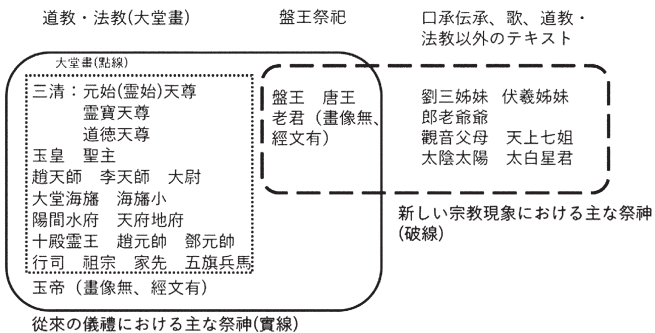


圖3 新舊儀禮における祭神

教)を教えた(口承傳承)。ミエンと似た道教・法教的儀禮をもつ民族(たとえばムン [Min, 藍靛ヤオ])との違いを示すときに、「ミエンは「老君人」*lu kuan mian*で

う説いた(口承傳承)。郎老が兄で老君が弟であった(口承傳承)。老君には妻がいるが、郎老は獨身である(口承傳承)。

「老君」*lu kuan*は、道教・法教系の經文にも現れる。しかし、「大堂畫」に畫像はない。「道德天尊」とは別の神である。ミエンに「三清」の法(道教・法

あるが、彼らは異なる」と言う。このように「老君」はミエンのアイデンティティの辨別的特徴ともなっている。
 「劉三姊妹」*liu san fu m fei-mua* (「劉三妹」とも)は、天地人を創造した。「置地置天置人」(口承傳承)。歌を創造した。「劉三妹娘置歌曲」(「親家禮書」。字體は原文どおり)、「劉三娘言傳世上 傳行世上小朝州：」(「唐王歌」歌詞冒頭)とあるように、いろいろなものの創造神としての位置づけとなっている。

「伏羲姊妹」*fu xi hei tsai-mua* は、伏羲女媧傳説の變形したものである。太古に大洪水があり、「伏羲」とその妹だけが生き残った。「郎老」が二人に夫婦になることを説き、二人は夫婦になった。瓜を産んだので、それを分割して撒くと人になった。瓜の果肉の部分は山地でミエンになり、種子は平地でミエン以外の人々(「百姓」*hei? fip*)になった(口承傳承)。

「七姐」*set? tsia* は「盤王」の娘である(口承傳承)。あるいは、「唐王」の娘である(口承傳承)ともいう。「觀音父母」*ciem-tiem pəp? nem* は女性神で、人類に



写真5 チエンラーイ縣 HCL 村の廟の祭神
中央向かって右側が〈盤王〉、左側が〈唐王〉。下方左右に展開しているのは、〈十二姓瑤人〉の祖先像。

言語や男女の區別、民族毎の衣装の區別等、世の中の様々な區別を教えた神であると言われている（口承傳承）。以上述べた神々の多くは〈玉帝〉と同じく〈半天高樓〉に在るといふ。高位ではあるが比較的身近な神が〈半天高樓〉に住んでいると位置づけられよう。〈太陰先生〉

*thə: i: jəm fən-
sej* 〈太陽先
生〉 *thə: i: jət j
fən-sej* 〈太白
先生〉 *thə: i: jət j
fən-sej* という
神もこの〈半天
高樓〉に在ると
いふ。この三位
の神はリストに
は擧がっている
が、神像はない。
逆に〈三清〉

fən mət jət は、リストにはないが、〈銀山廟堂〉には小さい像が祀られている。この他、リストに擧がっていないが、降神することがある神もいる。

同じチエンラーイ縣の HCL 村は先述の如くタイ國內のミエン村落で初めて〈廟〉が作られた村である。この〈盤王廟〉の祭神は、〈盤王〉〈唐王〉〈七姐〉のほか、〈十二姓イウミエン〉の各姓の祖先をレリーフにしたものである。先に述べたように、この〈廟〉を建てるきっかけとなった託宣は〈唐王〉を祀れば村が安穩になるというものであったが、最初に作られたのは〈盤王〉の像であった。後に〈唐王〉像も作られ、ようやく託宣通りになった⁽¹⁹⁾（写真5）。

(二) 祭神を伝えるメディア

こうした神々を伝えるメディアは、道教・法教系の経文ではなく、〈盤王〉祭祀儀禮の経文、「親家禮書」などのマイナーな儀禮テキスト⁽²⁰⁾、口承傳承、口承・即興の〈歌〉と書き附けられテキスト化した〈歌〉である。

〈盤王〉祭祀儀禮經文中には、〈飄遙過海〉神話が入っている。その一例を示す。J・ルモワンがラオスのルアンパーン縣で採集した〈完益歌堂〉經文である。「又來交過寅卯二年。天地大焯三年。……（中略）……十二姓猪祐子孫。不耐之何思「言偏十量」思着。正來飄湖過海。限定七朝夜。船头到岸。船尾到街。一千路途。过了三月。船路不通。水路不通。船頭不得到岸。船尾不得到街。十二姓猪祐子孫愁氣在心。投天無路。入地無門。投山高。叩水水深。恐怕枉風吹落五海龍門。原在船中里内。思量着門路無人救得十二姓猪祐子孫。當初以來。盤皇聖帝差有五旗兵馬。隨后救生。恐怕救得。一十二姓猪祐子孫。願在船中裡。備辦白紙銀錢三牲長利。教動祖宗香火太祖家先五旗兵馬回頭轉面。許上完益部書歌堂良願在案。進在船中裡内。擔保十二姓猪祐子孫。未經三朝七夜。船路也通。水路也開。送船到岸。送馬到街。割落廣東韶州府落（樂）昌縣庭。割三年四歲。各人開口謫譴。備辦還恩答謝聖。」（字體は原文通り。ギユメ「」内に示したのは、フォントが無い文字の構成。丸括弧（）内に示

したのは、その前の字の訂正）（抄譯 寅卯の二年が過ぎると大干魃が三年續いた。十二姓イウミエンの子孫たちはどうしようもなくなくなり、相談して海を渡ることにした。出航して三ヶ月をすぎると、船が進まなくなった。十二姓イウミエンの子孫たちは憂え、風に吹かれて海中の龍門に落ちることを恐れた。昔から盤皇が五旗兵馬を遣わして救ってくれたことを思い、祖先や五旗兵馬が願みて救ってくれるよう、願掛け書を献上して祈った。すると、船が進むようになり、廣東の韶州府樂昌縣に着いた。三、四年住んだ後、願ほどの謝恩儀禮を行った⁽²⁾。この他、筆者がナン縣で撮影した「大王書」中の「還愿大王意者」（字體は原文通り）という經文にも〈飄遙過海〉のエピソードが入っている。

「親家禮書」*shin-ka lei sau* は、婚禮の時に、婚禮の祭司が新郎新婦の前で読み上げるテキストである。テキストの内容はどの異本も、おおその内容は相似しているが、細部はかなりの變異がある。よって、書寫者の裁量がある程度入っていると看取される。これは、道教・法教系儀禮の經文が書寫時に文言を變更しないこと

を原則としているのと對照的な特徴である。このテクストに、〈伏羲姊妹〉と〈飄遙過海〉のエピソードが書かれている。〈劉三姊妹〉についても言及されている「親家禮書」寫本もある。

以下に「親家禮書」の例を示す。〈飄遙過海〉で、神々に救護される下りである。

「又到寅卯二年。天地不可。大旱三年。……（中略）

……作得飄飄過海。一千之路。过了三朝的日子。船路不通。水路不通。又怕大風吹落海底龍門。大家商量。合意正來許起大神良愿。未經三朝三夜。船行到岸。馬行到鄉。來到廣東道韶州府樂昌縣。停下一年一歲过了。正來還錢散愿。消愁解意过了。」（ナン縣ムアン郡ボー區NG村鄧FK氏所藏の「親家禮書」字體は原文通り）。（抄譯 寅卯の二年に大旱魃がおこり、ミエンたちは海を渡ることにした。三日経つと船が進まなくなった。ミエンたちは風に吹かれて海底の龍門に落ちるのではないかと恐れ、相談して神に祈った。船は無事岸に着き、廣東道韶州府樂昌縣に到った。そこに住んで一年後に願ほどき儀禮を行った）

既存儀禮の隙間を埋める

「又到寅卯二年。天地大焯。……官食（倉）無米。百姓無粮。……得見東方邊重有萬里州廷。思量過海。十二姓獠人。就來交過洪武開枝。人民退朝。七月十五中隔日。流船過海。流路過街。流鄉過界。過得七朝七夜。船路不通。馬路不通。船行不到岸。馬行不到街鄉。當時被風吹落海底死了。人民無處投生。叩天之高。叩水之深。就來思作。前日以來。重有五旗（旗）兵馬。前來殺死。後來救生。十二姓獠人。原在般（船）中內里。就辦大州海岸。太百（白）明香。胡（湖）南龍康。清水六合。對圣灵盃。投叩聖王了。未經三朝三夜。般（船）路也通。馬路也通。般（船）行也岸。馬行也到鄉。般（船）來流到廣東道韶州府落（樂）昌縣。亭居安宅。就來办荅謝聖王面前了。」（パヤオ縣チエンカム郡PY村鄧KL氏所藏の「親家禮書」。字體は原文通り）。（抄譯 寅卯の二年になって大旱魃がおこり、人々には食べるものが無くなった。ミエンは東方に幾つもの國があることを見て、海を渡ろうと考え、船を出した。七日経つと船が進まなくなった。そこで風に吹かれれば沈没して龍門に落ちる。昔から五旗兵馬が救護してくれることを

思い出し、色々な供物を供えて聖王（盤王）に祈った。三日経たぬうちに船は進むようになり、廣東道韶州府樂昌縣に着いた。そこに住んで聖王に謝恩する儀禮を行つた⁽²²⁾。

筆者は五本の「親家禮書」を撮影して比較したが、文が同一のテキストはなく、〈飄遙過海〉や〈伏羲姊妹〉についても、大筋は同じであっても文言の大幅な違いが見られた。この点でも、道教・法教系の經文とは大きな違いがある。

傳承メディアの違いを見ると、道教・法教の神々は、固定的な經文による書承傳承と〈大堂畫〉という畫像によつて傳承されている。盤王祭祀の神は、固定的な經文があるが、畫像はない。更に、〈盤王〉らへの謝恩儀禮である〈歌堂〉では供物による〈飄遙過海〉の再現がなされている⁽²³⁾。以上が従來の儀禮に於ける神々の傳承メディアである。一方、新宗教現象における神々は、口承傳承と〈歌〉、固定的でないテキスト、および盤王祭祀の經文によつて傳承されている。更に、HCL村とHCP村の〈廟〉においては、これまででなかった立體的神像と

して提示されている。このように、新しい宗教現象における神々は、従來の儀禮の神々とは異なるメディアによつて傳承されているのである。

六 結語 新宗教現象の特徴

新しい宗教現象は、〈廟〉を據點として擴大してきた。しかし、これは従來の道教・法教系儀禮に取つて代わるものではない。道教・法教系儀禮に缺けている面を補う形で補足的に展開している。(一)新しい宗教現象では、従來の祭司が儀禮を執行する形に對し、シャマンに神が降り儀禮を執行する方法を導入した。(二)儀禮執行に讀經ではなく歌唱という新たな方法を導入した。これにより、經文讀誦の必要がなくなった。そのため、女性の儀禮參入が可能となった。(三)用いる言語も儀禮語ではなく、歌謠語である。また、(四)従來の道教・法教系儀禮では對象としてこなかった神々を祭神とし、可視化した。(五)その祭神を傳承するメディアも、道教・法教系の經文ではなく、口承傳承やマイナーな儀禮テク

表5 道教・法教系儀禮と〈銀山廟堂〉の儀禮

	道教・法教系儀禮	HCPの〈銀山廟堂〉における儀禮
儀禮執行者	男性祭司	女性シャマン(壓倒的多数) 男性シャマン(少数) 男性祭司(降神して司祭)
降神	しない	する
儀禮執行者の類型	Priest(祭司)	Shaman(シャマン) Shaman-priest(シャマン祭司)
唱え言	經文の讀誦(テキストあり) 漢字知識が必要	歌(テキストなし) 漢字知識は必要なし
言語	儀禮語 tsio wa: (「廣東語」) 漢語雲南方言 k'e' wa: ミエン口語 mien wa:	歌謡語(文語) dung nei wa: ミエン口語 mien wa:
祭神	〈大堂畫〉の神々(道教・法教) 〈玉帝〉 道教・法教系經文に登場する神々 祖先 師父 〈盤王〉〈唐王〉(盤王祭祀系經文に登場、像なし)	〈老君〉 〈郎老〉 〈劉三姊妹〉 〈伏羲姊妹〉 〈觀音父母〉 〈太陽先生〉 〈太陰先生〉 〈太白先生〉 〈盤王〉〈唐王〉(像あり)

道教・法教系經文以外の
テキストと口承伝承におけ
る神々

ストであった。(六) 女性シャマンは、男性祭司の後継者難により擔えなくなってきた小儀禮(強化儀禮、祓除儀禮等)を擔當しているが、表1のA列・B列の大・中規模の儀禮を擔當するには到っていない。このように、ミエンの新しい宗教現象は、従来の儀禮がカバーしていない隙間(ニッチ)を埋める形で補足的に展開されてきたのである。

附記：この論文は、科学研究費補助金・學術研究助成基金助成金(26370944, 15H03282, 15H02615, 18K01186)による調査研究の成果の一部である。

註

(一) 二〇〇二年時點で四萬五七一人 (Krom Phathana lae Sawadika, Krasuang Phathanasangkhom lae Khwanmankhongkoangmanut 2002 Thammip Chumchonbontisung 20 Cangwat nai Prathethai [Higland Communities within 20 Provinces of Thailand 2002], p. 17-18)。タイ山地民の人口統計は、二〇〇二年のものが最後であり、その後は民族別の統計がない。

- (2) 丸山宏「講演録」ヤオの儀禮と漢字經典」(『横濱ユラシア文化館紀要』六號、二〇一八) 九〇頁。
- (3) ミエン語の表記は基本的にIPA(國際音標アルファベット)を用いる。ミエン語の表記としては、Purnell (compil. & ed.) 2012 *Iu-Mien-English Dictionary with Cultural Notes* の表記が標準となっているが、合衆國のミエン以外の読者には甚だ読みにくいものである。そのためIPA表記に近づけた表記とした。聲調は煩瑣となるため省略した。また、ミエンの漢字表記は山括弧(ハ)で括って示す。
- (4) 吉野晃「II 第一章 ヤオ族と道教」(野口鐵郎・遊佐昇・野崎充彦・増尾伸一郎編『講座 道教 第六卷 アジア諸地域と道教』雄山閣、二〇〇一) 七六―七七頁。
- (5) この例は「度戒」という儀禮を経た者の稱號である。その前の「掛燈」だけを経た者の場合は「三戒」が「三臺」となる。
- (6) 現在では漢語雲南方言はリンガフランカとして使われず、中國語を學ぶ場合は普通話(大陸系)か國語(臺灣系)であるので、漢語雲南方言を話せる者の數は大幅に減少している。
- (7) Purnell, H.C. *An Iu-Mien — English Dictionary with Cultural Notes*. (Chiang Mai: Silkworm Books, 2012) p. 613.
- (8) 吉野晃「廟と女性シャマンタイ北部、ユーミエン(ヤオ)の新たな宗教現象に關する調査の中間報告」(『東京學藝大學紀要 人文社會科學系II』六四、二〇一三)。吉野晃「歌」の詠唱法と儀禮への應用「タイ北部、ユーミエン(ヤオ)の新たな宗教現象に關する調査の中間報告2」(『東京學藝大學紀要 人文社會科學系II』六七、二〇一六)。
- (9) 佐々木宏幹『聖と呪力の人類學』(講談社、一九九六、初出は青弓社、一九八九) 二四八―二四九頁。
- (10) 吉野晃「廟」における女性シャマンの組織と儀禮の變化「タイ北部、ミエン社會における新たな宗教現象に關する中間報告」(『年報タイ研究』二〇、二〇二〇年)。
- (11) Purnell, H.C. (compil. & ed.) *ibid.* p. 612.
- (12) Purnell, H.C. (compil. & ed.) *ibid.* p. 145.
- (13) Purnell, H.C. (compil. & ed.) *ibid.* p. 611.
- (14) 吉野晃「前掲「歌」の詠唱法と儀禮への應用「タイ北部、ユーミエン(ヤオ)の新たな宗教現象に關する調査の中間報告2」」一〇頁。
- (15) Purnell, H.C. "The metrical structure of Yiu Mien secular songs." (Lemoine, J. and Chao, C. (eds.) *The Yao of South China: Recent International Studies*. Pangu, Editions de l'A. F. E. Y., 1991)

- (16) 神奈川大學大学院歴史民俗資料學研究科『中國湖南省藍山縣ヤオ族儀禮文獻に關する報告 Ⅰ』（神奈川大學歴史調査報告第一二集）（神奈川大學大学院歴史民俗資料學研究科、二〇一一）八六頁。
- (17) タイ北部のミエンにおける歌と歌謡語（4）——『唐王歌』發音と注釋——（『東京學藝大學紀要 人文社會科學系Ⅱ』七〇、二〇一九）
- (18) Mongkhol Chantrabumrung “Reproduction of Yao culture: a case study of Pien Hung shrine at Ban Huey Chang Lod in northern Thailand.”（塚田誠之編『中國・東南アジア大陸部の國境地域における諸民族文化の動態』國立民族學博物館調査報告六三、吹田・國立民族學博物館、二〇〇六）p. 262.
- (19) モンコンの前掲論文には、唐王を祀れという託宣にもかかわらず盤王を祀ることになった事情は書かれていない。發起人たちが中國廣西壯族自治區のヤオ族の廟を訪れ、そこに祀られていた神像の寫眞を撮ってきて参考にした（Mongkhol C. *ibid.* p. 262-263.）というから、その廟における祭神の構成に影響された可能性はある。
- (20) 「親家禮書」は、婚禮儀禮で讀誦されるとはいえ、神を祀る内容のものではなく、新郎新婦に説諭する内容のものであり、また後述するように可變的である。そのため、固定的で神祭祀に用いる「經文」とは區別して「テキスト」の語を用いる。同様に可變的な文章をテキストと言ふことにする。
- (21) Lemoine, J. “Un curieux point de l'histoire: l'aventure maritime des Miens.” (In Jacqueline, M. C. et al. (eds.) *Langues et techniques nature et société, II: approche ethnologique approche naturaliste*, Paris: Edition Klincksieck, 1972) p.62 シュンヌと Lemoine, J. Yao Ceremial Paintings (White Lotus, 1982) pp. 14-17 の寫眞版によつて修正した。
- (22) これらのテキストに共通して出てくる〈樂昌縣〉の *ts'ing guen* は現在の廣東省韶關市樂昌市であり、乳源瑤族自治縣の北に接する。ミエンの村落もある。〈樂昌縣〉という地名は、〈飄遙過海〉の末ミエンの祖先たちがたどり着いた場所として、タイのミエンの許でも廣く知られている。謂わば、ミエンの第二の故地として、ミエンのアイデンティティにも深く關わる地名である。
- (23) 廣田律子「湖南省藍山縣過山系ヤオ族の祭祀儀禮と盤王傳承」（『東方宗教』二二二號、二〇一三）一五―一六頁、一三頁。